

## 前期分共同活動日当を支払

### お待たせしました

平成30年度前期分の共同活動日当を支払います。4月から9月までの活動に対して支払いますが、作業結果の集計と日当の計算、支払いに伴う書類の作成と時間がかかり、この時期となつてしまいました。

今年度の活動は12項目です。その中には総会のように日当の支払い対象にならないものもあります。また、農地隣接地として対象活動としてきた県道法面の除草作業は今年度から除外した

こともあり、支払総額は昨年度より少し少ない26万2千円となります。これからの活動は、水路や農道などの整備などが主体となります。こうした整備は、農作業が少しゆっくりになる冬にかけて本格的になります。

また今年度が従来計画の最終年度あり、その間の状況の変化の調査や確認、従来位の計画に対する達成の報告など、様々な作業が待っています。引き続きよろしく願っています。

11月3日は小郡地域の福祉まつりでした。今回は地域交流センターの建て替え巧治の関係で会場が半分程度となり、バザーなどの配置も大幅に変更になっていました。

八方原のふれあい朝市もいつもの入り口に近い場所から総合支所の玄関口に移動になっていました。



開会前から圧倒的な人だかり（福祉まつり）

### 生鮮野菜に人気集中

少々お待ちフライング気味で販売開始せざるを得ないような状況でした。開会の挨拶の時には、写真のように来店者が押し寄せるといった状態となりました。早々と完売となり、店じまいとなりました。

生鮮野菜の人気がこれほど高いとは信じられないほどです。やはり、多くの人が安全で美味しい野菜を求めているということですね。皆さま、お疲れさまでした。

### やはり君の来るところではない



餌を探して草地を走るイノシシ（10月28日）

9月の下旬、地域内のあちこちでイノシシの子ども「うり坊」の姿を見るようになりました。どうやら親からはぐれた子どものようなようです。民家の庭先や畑で餌を探している様子でした。こうしたことは決して良いことではありません。野生で生きていくイノシシにとっては、自分で餌をとることを学べないからです。また可愛いから餌などを与えてしまうと、益々彼らの生きる力をうばってしまうこととなります。

11月になって姿を見なくなりましょう。どうやら山に帰って行ったのでしよう。遅く生き延びてくれると良いのですが。

# アイデアが田舎を宝の山に

小紙でも毎回紹介している「農村環境の未来を考える研修会」今年度は会場をゆめ花博の会場「きららドーム」で10月31日に行われました。数々の優秀団体の表彰に続いて基調講演がありました。

今年の講演のテーマは「山口の田舎は宝の山」です。講師は「日本の田舎は宝の山」という本の執筆者、曾根原久司さんです。彼は山口県の農林業は今の売り上げ700億円を付加価値値に上手に付けることで5倍から10倍に

できると話し始めました。

いったい何を言い出すのだろうか？みんなが首をかしげながら、その痛快で不思議で、しかも特別なことではない話に引き込まれました。

曾根原さんは金融コンサルタント会社の社員として働いていましたが、バブル崩壊後の惨憺たるありさまで、仕事に見切りをつけました。東京からとなりの山梨県北斗市白州町に移住します。そこで耕作放棄地を借りて農業を始めます。一人で開墾して2ヘクタールの水田を復活させました。また林業にも手を広げ、山を買いました。その山から雑木を切り出し、薪にしていたのですが、試しに近くの別荘地向けに薪の販売を始めたといいます。これが売れて300トン、800万円の収入があったと紹介しました。そこから市役所に依頼されて須玉町増富地区の地域活性化に取り組むことになりました。面積は1000平方キロメートル、しかし人口は400人、高齢化率は66%、耕作放棄率は52%という限界集落です。

J Aも撤退、販売店も皆無という場



「丸の内のビジネスマン」が自分たちで作った米の地酒

所から活動が始まります。東京の丸の内、日本でも最大級の不動産会社と、都市と農村をつなぐ「空と土プロジェクト」を2008年にスタートします。

都市で働く人々に農家の作業をボランティアで応援してもらうというのが、私たちの発想ですが、彼は全く違った見方です。「都市には身体感覚を失いかけた半分病人のような人々がたくさんいる。彼らの健康を取り戻し、新たなエネルギーを注入するツアーを提供する。」というのです。その運営母体として「NPOえがおつなげて」を発足させます。

初めは「開墾ツアー」です。耕作放棄地の棚田を復元し、「田植えツアー」

で稲を植え。「草取りツアー」で雑草管理し、「稲刈りツアー」で収穫するというものです。そのツアーの料金が日帰りでワンセット80万円、宿泊の場合は100万円だといいます。それらの負担は不動産会社が払うわけですが、信じられないような金額ですが、会社としては社員の教育と健康管理として非常に有効と考えているのです。

どうせなら「酒米」を植えようということになり、「ひとごち」という品種を植え、できた米を醸造会社に依頼してお酒にしてみたいです。それできたのが「地酒 純米酒 丸の内」です。あつという間に売り切れだそうです。続いて純米焼酎も作成、その名も「霞が関」。これも在庫なしとのことでした。

こうしたことで人口400人の地区に農業観光の収入がなんと1億円を超えたといいます。その後も他の企業、他地区での展開、林業でも住宅建築会社と協定を結ぶなど、その活躍は留まることがありません。

今や曾根原さんは日本中で講演やアドバイスをするなどで引っ張りだこ状態です。「山口の田舎は宝の山」、そうかもしれない。しかしその宝を見つけて磨いて、ビジネスにするのは、私たち自身です。



穏やかな口調で信じられないような事実を次々に